

資料(1)

添田 晋「農民へ訴う」(昭和六年1931二月六日刊)——(注21)

(注21) 前述した通りこの冊子は第二次黒色戦線社(発行人星野準二)月刊「黒旗」昭和六年(1931)二月二十六日発行の第3巻第2号別冊のかたちで出されたものである(下記中傍点は原文にはない)。

農村窮乏の声やまことに久しい。天下万人にしてこれを聞かぬ者はない。救いの手をまつことすでに久しい。されどもその現われぬこと永遠だ。かくして歳月は空しくながれ農村の窮乏はいよいよ深刻となり、有るか無きかの生命もいまや風前のともし火となつてきた。坐して死をまつ者は別だ。起とうとする者にはおのずから道がある。農民の処する方策があるではないか。然り而して、農村新生の方策について語らうとするのがこの小冊子の目的である。

第一に言う、救いの手を他に待つことを止めよ。ブルジョアの金言さえ言っているではないか「天は自ら助くる者を助く」と。農村を救うものは農民自身のほかにはない。

かの無産政党の者どもの説くところは何だ。かれらは言う「諸君よ、諸君の要求は政治手段によらなければ解決できぬ。故に吾等に投票せよ。吾等は代議士となつて議会に行き百姓に都合のよい法律をつくつて諸君の幸福を実現しよう」と。

吾人はこれに対して、それは無駄なことだと言うのだ。吾人は憲法によつていわゆる人身の自由が保証されている筈であるが、今日、人身の自由はどこに有るか。一片の個人的憎悪のためにさえ、権力の位地にある者は、罪なき農民を獄裡におくることができるではないか。地主は充分に保護せられるときに、小作人は何等の理由なくして圧迫せられねばならない。しかも、かの法律なるものは両者の平等を規定している時である。

いかに立派に見える法律や政治が制定されようとも、吾人にとってはそれは意味がない。これについて適切な例話がある。それは今から三十年ほど前のロシアで行われた農奴解放の歴史である。当時、ロシアの農民は、農民にして農民に非ず、人としての人權はことごとく地主領主に奪われ、いかなる意志表示をなすことも嚴禁されていた。黙々として貴族に仕えねばならない奴隷であつた。それが世の同情者の運動の結果、自今、農奴は解放せらるべし、かれらは自由民たり、の農奴解放令の発布となり、法の上からすればかれらは最早一個の自由民たるべきはずであつた。法は自由民たることを宣言すれば足りる、それで事は済む。しかし、済まないのは農民で

ある。農奴の求むるものは、こうした一片の空なる法文ではない。解放の事実、自由農民たることの事実を求めているのである。農民が農民たる所以は土地を耕すからだ。耕すべき土地をあたえずして何が解放であるか。何が自由農民であるか。土地を占有しているのは富裕なる富豪ともである。ここに於て自由農民であるべきはすのかれらは再び新しい主権者である地主の下に奴隷として生活して行かねばならなくなった。法はインチキに過ぎないと言ったが、それはこの例話でよくわかるではないか。

若しも、土地が誰のものでもなく耕やす者が自由に使えるならば、農奴であろうとしても奴隷ではあられない。強いて奴隷の名をつけても、事実として自由農民だから農奴ということばは消えてしまふに違いない。

農民諸君、吾々の求めるものは事実で法文ではない。若しも、農民が大同団結して、直接に地主の土地を奪いかえしたなら、いかに政治家どもがあわてふために数多くの法文をひねくり出そうとも、事實は法文では動かさぬ。反対に、いかに無産政党的政治家達が土地の共有を論じて、また仮りにそれが法文となって現われても、法文に従って土地所有者がハイと言って土地を放棄するときお目出度い地主諸君がいるなどと夢想することは絶対にできない。ここが肝心のところである。無産政治家達により、かれらが作る法律により、その遠い将来に、農民は現実を得るものは何もない。しかも、無産政治家が法律をつくる日はいつか。刻々として窮迫のせまる農村が死滅するまえにその日をむかえる可能性があるうか。幸にして、その日をむかえたとして、それはさきにも述べたように、それは一片の空文ではないだろうか。

この故に吾人は言う、「農村の解放は農民自身の手でやらねばならぬ」と。換言すれば農民が農村の解放を他人の手に期待するかぎり、農民の生活は永遠に改善できないということである。

世の中にはつねに何等かの理由に依存して、特権の地位につこうとする馬鹿者が絶えない。指導者という輩がこれである。かれらは農民を愚弄して言う「百姓諸君は耕作は得手だが、耕作と社会改造のことは別である。百姓諸君は社会科学を知らぬではないか。それ故、社会改造の仕事はそれに熟達した吾々に任せ、吾々の指導に服従しなければならぬ」と。

諸君、吾人は言う「農民の要求を知るものは農民自身だ」と。自分自身の、すなわち自己の要求にもとづいて改造を行えばこそ解放が達成されるのだ。盲滅法に世の中が変わりさすればよいというのでは断じてない。自己みずからの要求にもとずかねばならない。それを知るものは農民自身である。故に吾人は言う、「指導原理も社会科学も無用の長物にすぎない」と。指導者のもとめるものは農民の解放ではない、かれらの指導下に農民を置くところの支配的欲望の達成である。指導自体が指導者の目的である、指導者はそれで満足なのである。ヘゲモニーが目的である指導者と、解放が目的である農民とは、その目標がまったく別なものである。これに気付かず違つた目的をもつた指導者と農民とが一つになって無意味な道を歩んでいるのが残念ながら現在の農村運動の縮図である。

社会の変動なるものは、マルクス主義の説くごとく、物をつくる方法によって無意味に変わるものではない。社会大多数の人々がつてゐる意識的、無意識的な思想が次の世にあらわれるのである。ただそのもてる思想が明確を欠き、無意識的不明瞭な場合には、野心家どもの偽瞞におちいつて、折角の社会改造も得るところなく終わってしまう。野心家どもに乗ぜられぬことが肝要である。このためには、農民自身が自己の確たる目標を有たねばならない。封建社会を倒した、倒しただけでは何にもならない。新しい社会建設が遅滞しているあいだに、野心家どもは官僚となり、富豪とむすびつき、金儲けのために万人を犠牲とする今日の経済組織社会をつくつた。このことが有つて七十年、吾人は益々不幸となり、疲弊が加わり生活が窮迫したのであるが、その罪の半は、目標において明確を欠いだ吾々自身の側にある。されば吾人は言う、「明確なる目標をもて」と。以上を総括して、農民の道は「農民の解放は農民自身の手で」ということと、解放のためには「明確な目標をもて」ということに帰する。

現在、農村は行詰まっている。生活は零落し流浪寸前である。われわれは否が応でも考える「自分の汗で田を作ったのになぜ収穫した米を自分自身の胃の腑に食わせることができないのか」と。収穫の半分以上は地主に奪われ、その残りさえ自分のものとはならず、それを売って金に替えなければならないが、その金は僅かであり、結局借銭せねばならない。その額は積り積りどうにもならないのが現状である。こういう生活を続けるかぎり首を吊るよりほか道はない。こういう暮しとは縁を断つべきだ。

第一に、作つた米を金に換えず、農民自身の胃の腑に食わせようではないか。いままでも金を出して買っていたものは、買わずに吾々自身の手で作ろうではないか。こうすれば、金の要らない世の中が忽ち来るではないか。

これは原理でもない、空想でもない、実地だ。社会組織が何であつてもよい。それは他人のものだ。ひとの社会組織は抛っておけ。無視せよ。百姓は百姓自身のやり方でやろう。要するに百姓は、おれたちの考えでおれたちの村をおれたちで、今、つくろうということである。百姓の中から代議士を出し、かれらが政府の役人どもになつて、百姓に都合のよい法律を作つてやろうなどという、何十年さきのことともわからない悪夢とは違ふ。

農民はなぜ農民自身の意志によつて生活をしないのだ。ある者は反対するだろう「現在の社会組織がそれを許さないから」と。嘘をつけ！ 農民諸君、奴隷根性はかくまでに深く人間の心に巢喰つているのか。やろう、為そう、行おうという意志がない。社会組織が

変らねば百姓自身の村がつくれなければならないのではなく、かれ自身が鉄のくさりに自分をしばりつけているだけで、作らぬから作れないのだ。今日の社会がいかなる社会組織であるか、それは誰も知っている。法律や裁判所や警察が誰の味方であるかを知らぬ者はない。地主を憎むことは小作人の子どもにしてからがそうだ。そうした社会組織を倒さねばならないことは言うまでもない。

しかし、社会組織を倒さねばならぬからといって、政治的組織によってそれを達成しようとしても駄目だ。フランスは共和国、日本は天皇制、伊太利はファシズム、その政治形態はさまざまであっても、資本主義という社会本質に関しては共通である。いかに法文をつくりかえ、いかに政治形態をつくりかえようと、社会組織の中心である経済組織の変革が行われなければ、社会そのものは全く変わるものでない。政治制度を通じては社会組織を変えることは不可能である。而して、社会組織を変える方法はただひとつ、社会の中心におかれた経済制度を変革することである。吾人が「経済行動」とよぶものはこの意味である。経済行動とはいわゆる組合運動など経済主義を指すものではない。

現在インドにおいて行なわれているガンジー運動なるものは、宗教的な面があり、無抵抗主義であり、全体としては新興インド民族ブルジョアジーの、イギリスの植民地からの独立をめざすところの民族運動であるが、この運動が、今日のごとく盛んになり、老英国の命運を左右する大きな勢力となり得たのは、ひとつの理由がある。それは、ガンジーの運動が、いわゆる政党運動の仲間入りをせず、また、理想主義のお説教をするのではなく、ひとつの注目すべき運動形態をとっているからである。

ガンジーズムをとった方法は、ひとつの純粋経済行動であった。インド民衆は英国経済と絶縁した。インド民衆は英国製のものはずべてポイコットを行ない、必需品の綿製品のごときも、不便を忍んで糸車をまわし、手製の布を織り、イギリス資本主義の紡績会社の立派な綿布の不買同盟をおこした。租税のごときも一文も支払わない。インド人のとったこの経済行動の方法は実に有効であった。政治的にインドは英国の植民地であるが、経済的にはインドは英国との関係を断った。

これがガンジーズムの経済行動である。ガンジーズムは不完全だ、不完全でありながらも、それが経済行動であるが故に、英国資本主義は事実上インドから勢力を駆逐されようとしている。

若し、ガンジーズムが政治運動であれば、イギリスは一片の辞令「爾今インドは自治領たるべし」と、その植民地に告げればよい。その実質は英国人のインドたること毫も変わることが無いであらう。

農民諸君、この教訓のように、社会の中心におかれた経済制度そのものを衝いたならば、支配階級は亡ぶまいとしても、必然的に亡

ばざるを得ないのである。さきに、吾々が農民自身の要求にもとずいて農村をつくれといったのは、それが経済行動であるがぎり、支配階級はその依って成り立つところの根底を喪い、必然に崩壊せざるを得ないからである。

支配階級を倒さねばならぬことは屢々叫ばれるが、その方法は知られていない。おれたちがおれたちでおれたちの村を作ること、この実行によって、支配階級は崩壊し、社会組織は変わるまいとしても変わらざるを得ないのである。

さればここに実行せねばならぬ経済行動とはなにか。それは前にも言及したが、それはもとより農村の自給自足である。もとより、吾人はガンジーズムではなく、民族運動でもない。解放運動である。農村が為さねばならぬ経済行動には三大眼目がある。

一、自給自足の実行

二、共産の実行

三、共存共栄、相互扶助の実行

第一に百姓の生活は村かぎりで行こう。「豊葦原瑞穂の国にうまれきて米が食べるえぬとは嘘のような話」、米をつく百姓が米に飢えるという法がどこにあるか。要るものを町の商人から買おうとすればこそ生活の零落がある。農民はこれからは米を売るまい。そして、百姓自身の胃の腑に食わすがい。百姓の要るものは不完全ながら村で作ろう。そのために生じる不自由には耐えよう。ガンジーズムの行なったように、村の経済生活は百姓の自給自足によって行おうではないか。人間に第一に必要な食うものを作らぬ都会は自給自足はできないが、食うものを土からつくる農村は自給自足の第一条件が備わっているではないか。

米も野菜も副産品も売らないで、金が無くても、どうして村の生活が立つか。それは今も言うように、村は食うものを作っているからである。食うものさえあればほかのことは何とかやって行ける。必要なものは手細工でもできる。

今日の農村は、農村の本来の性質からは段々遠ざかろうとしている。一体、農村とは何であったか。人は、草や木とことなつて、大地に根を生やし空中に枝をさしのべ、じつとしたまま養分を摂取して生きて行くというわけには行かない。土地を耕作して食物を生産せねばならない。労働が必要な所以である。胃の腑に食わせるために土を耕やすのである。それが今日では、農民の労働が何の目的で為されていくかと言え、金を得るためである。金に換えるためだ。相場をみて種を蒔く。儲けが目的である。北陸のある地方のようにオランダに輸出するためにチュリップを村中で栽培したり、信州とか群馬などでは桑を植えて蚕を飼うのに夢中になっているが、それは農民が絹物を着るためではなく、アメリカに輸出するためであり、都会のブルジョアジーのぜいたくをみたすためにすぎない。また、ある雪国の村では全村が耕作を止めて、金持の息子どもの雪遊びの道具であるスキーのそりをつくって金儲けをしようと熱中しているのである。このように農村の本来のすがたは失われつつある。人間に欠かせぬ米作りは時代後れと言って嘲笑され、農民も金を獲

ようと狂奔しているのが実状である。金のために義理人情はすたれ、相互扶助のならわしは地に落ちた。世の中はみにくい争いごとでいっぱいになり、誰もが安からぬ心を抱いて生活しなければならぬ。

これでは幸福と言えない。今日の社会組織は金なくしては生活できぬようにした。

しかし、やろうと思えば、農村では、それを無視して生活ができるではないか。

村の自給自足だ。スキも蚕もチュリップの栽培も止めよう。そして何より食うものを作ろう。そして片手間に要るものを手細工でこしらえよう。不自由でも背に腹はかえられまい。村が亡びるか生きるかという重大な時である。辛抱しよう。かくすれば金の必要はない。金を儲ける必要はない。金の要らぬ世の中になるのだ。金のためにあくせくする社会に決別し人はその能力に応じ、そののぞむ場所ではたらく共同の生産と自由を享有してよりよい消費が保証される。村で生活すれば一厘もいらぬ、またとないよい社会である。

今日の村はもう行詰まってしまった。何とかしなければならぬ。

この叫びは嘘でもなければ法螺でもない。全国農民の血の出るような切迫、真剣な叫びである。この機にこそ、金を農村から駆逐し村の自給自足を行なうために、農村を糾合することは、その機会は今日を措いてはない。

人間社会の基調が共存共栄、相互扶助にあることは言うまでもない。ただ、金銭のために利害が衝突し、互に反目せねばならぬ。しかし、村から金が消え、村は大きなひとつの家族となつたいま、吉凶禍福はみな分け合おうではないか。俺のもの、他人のものと角突き合わすまい。百姓は一樣に野に出て肩をならべて共同で耕作し、種を蒔き、灌漑をつけ、収穫をし、味噌も醤油も共同でつくり、共同で使用する、発動機も、精米も、揚水ポンプも、噴霧器も、持ち合わせているものは共同で提供し合おうではないか。

能力に応じてはたらく、いるものを共同倉庫から自由に持ち出し、共存共栄の共産の村にかえらう。差別もなければ支配もない。村は活気づき、男女は自由で、創造的精神が生き生きとはたらく、農村新生のめちを辿るであらう。それが全村運動である。

さて、茲に解決せねばならぬ三つの大きな問題がある。

- 一、自給自足できぬもの
- 二、納税
- 三、年貢米などのこと

農村の自給自足、それはどこまでも守らねばならない。町からも都会の商人からも何も買わない。そうなれば肥料はどうするか。吾々は豆糟のほかなにも金肥を使用しないで立派に収穫をあげている村を沢山知っている。熟練した多収穫栽培者は余り金肥を使用して

いない。化学肥料を使わないで耕作するには自然肥、温度、耕作深度、通風、播種法等に充分な注意を向けねばよいと言われている。ブルジョア新聞や雑誌も村は購読すまい。それらは町の労働者から寄贈してくれるだろう。部落の掲示板でそれを読めばよい。

石油ランプの村は石油が無くなるであらうし、電灯は消されるかもしれない。しかし樫の実からは蠟燭がとれ、菜種からは油がとれる我慢のできない問題ではない。日出れば野に出て没すれば一日の労働が終る。しかし明るい灯はいずれ自給自足の工夫が為されるであらう。要するに村はそれでも生活が立つ。物質的には乏しくとも生活は却って愉快となる。その反対に、農村が町や都会から何も買わず、銀行も、郵便貯金も用がなくなつたとき、肥料会社も、銀行も、政府事業も、商人も、資本家も、新生する農村とは逆に死滅の淵に沈まねばならない。自給自足の経済行動は資本主義制度の中心を衝いて、社会組織を崩壊えみちびく原動力となるであらう。そのことは後述する。

町や都会の商人、資本家から農作物と物々交換の提案があつてもそれに応じてはならない。あくまで自給自足を堅持する。

若し、都会と農村のあいだに物々交換を行なえば、その尺度として金が発生する。そして交換経済が復活し、資本主義の原点が蘇生する。革命は消えてしまふ。

金を無くするには、社会は農村と都会とに分立してはならない。分かれていれば交換が発生し金が発生せざるを得ない。

故に、社会はこの誤まつた方向から引返して、分立している都会と農村とをひとつにしなければならぬ。農耕と工業とが近代的に合体することが必要である。その方法は第一に今日の行詰つた農村が速かに自給自足を開始してその端緒をつくるほかに道はない。

この場合、村落は一時は原始的手工業時代にかえるが、この運動の拡大するにつれて、都会の労働者は、農民のこの理想運動に共鳴し、都会を去つて農村に帰えりそこで工場的工業をはじめるであらうことは疑う余地がない。勿論、それは初期には規模は小さい。必要な機械とか原料は、まだ、資本家の集中にあるからである。しかし、社会改悪の確実な萌芽は地に蒔かれた。

こうして、村の自給自足運動は、一面に於ては村を滅亡から救ひ、他面に於てはそれは支配階級を倒す原動力となると同時に、吾々の目標である農工合体の自由コンミュニ建設の第一歩となる。

「おれたちがおれたちでおれたちの村を作る」この自給自足運動は、村から村へ伝搬しなければならぬ。今日、日本の各地で農民運動は頻発しているが、吾々がここに提唱したような運動を知らないものが少くない。新聞も雑誌も口をつぐんでいる。その伝搬を恐怖するからである。吾々は進んで村から村へこの思想を伝えねばならない。そして聯合をつくらねばならない。

この運動が海岸の村と、山間の村とに行われ、その両者が聯合すれば塩が山間の村におくられ、塩飢饉は解決するし、村に住んでいない者であっても、この運動に共鳴するものは次第にその数を増し、これらの人には農村の困難に及ぶかぎりの援助の手を差し出す

であろう。

第二に納税のことであるが、衆知のように今日の窮迫せる農村は、納税するしないよりも、現実として不可能な状態にある。

凡そ租税くらしい理由のない搾取はない。政府は農民が額に汗して零細な結晶をしても奪って行く。それを何に使用するのか。裁判所や警察や憲兵どもをつくる費用とする。その者達は誰の味方か、誰のために働らいているか。大砲や軍艦や参謀本部の機密費になる。資本家どもが金儲けのためにする戦争の準備ではないか。政府の役人や、軍人や、巡査どもは、十年か十五年間、人民どもを見下して威張ってさえいければ恩給だ。そのとき生れて死ぬまで働きつづけている農村の百姓に対して、一体いかなる政府が恩給を支払ったか。百姓が納税した二億円という金が米穀法で消えていったが、この大金は一体誰の手にはいったのか。これらが税金の使いみちだ。

百姓は今日までただむざむざと搾られ、奪われたのだ。故に政府は言うではないか「租税は国民の義務である」と。どのような山間僻地のところにも税金収奪の役所がある。これが村役場のほんとうの仕事だ。

払うわけのない税金は払うまい。況んや、新しい自給自足の村がいかなる政府のおかげを蒙るだろうか。村のことは村で自主的に行う、橋もかけ、道路もつくり、灌漑もつけ、荒地もひらき、倉庫もたてる。共同の仕事場もつくる。一切のことが村の協力で為されるとき、政府の税金の根拠はどこにもない。

小学校を潰すならつぶせ、広々とした建物や、死物の画的な教育で本当の児童の補導はできない。吾々は村民の家を使って教場にすることができる。現代の悪教育に反抗している真の青年教員が村に来て、半農の生活をしながら、悦んで子どもを教育を引受けて行なってくれるではないか。税金のないところ村役場はつぶれ、農民は自主的な発案で協議し、実行する村の生活には二度と村役場の必要はない。上から治める——それは何のことだ！

第三に、地主の年貢米であり、小作料であり、土地や山林の所有権についてである。

世間の人間は征服者の歴史は知っているが被征服者の歴史については未知である。「かれは寝るところとしては公園のロハ台のみであるにかかわらず、朝鮮が日本のものになったと聞いて雀躍することを忘れない。かれは帰るべき家もなく、食うべき食物もなく、亡び行くあわれな身分でありながら、三井と三菱の財産の多寡について争い、掴み合い。喧嘩をも辞さない」何という救いがたい奴隷根性だろうか。豊臣とか徳川とか、かれらは天下を治めたといひ、英雄といわれるが、百姓の耕している土地を何のことわりも理由もなく、自分のものとした大泥棒ではないか。徳川という土地泥棒は、勝手に、百姓の土地を乾分どもの武將どもに山分けし、徳川三百年のあいだ、武士階級のもので泥棒した土地から年貢米をとりあげ、百姓の血と汗とを搾取しつづけた。

これが明治維新となり藩籍奉還となって土地の一部が政府の所有となり、一部は依然として旧大名の手にのこり、泥棒された土地は

百姓の手には全く還ってこない。泥棒した奴は公侯伯子男爵と華族となって土地からあがる地代、小作料で左りうちわをきめこんでいるのである。今日の地主なるものが、いかに土地の所有権を主張しても、もともと土地は百姓のものだ。吾々農民にはそれを奪いかえず権利がある。地主どもがいかに正しい手段によって地主となったと主張したとしても、それはその原点で泥棒された農民の土地が転々として地主の手にわたったというに過ぎない。地主のもてる土地は、泥棒された百姓のものであることには毫も変わることはない。吾々農民は土地を奪いかえず権利がある。土地は耕作する農民のものである。何人もこの権利を妨害することは許されない。

故に、小作料、地代は誰にも支払う必要はないのである。土地は農民が天下御免で自由に使用すべきものである。

それなのに、今日、隣家の圃が三寸、自分の地所につき出しているといつて目の色を変えていがみ合う。測量器や幾何学をつかって自他所有の境界線を強いて明瞭にしようとする。農民諸君、その愚を止めよう。境界も不用ならば、畦も高くつくる必要もない。その私有根性を捨てようではないか。村民全体で耕作しよう、自他の区別の必要はない。畦もいらねば境界の杭もいらぬ。広々とした田を共同で作ろう、苗も収穫も皆でやろう。

これまで書いてきたことは、皆な理想でありながら、理想なるがゆえに近づきがたいものとして、その実現を図ろうとしなかった。全く遺憾のきわみである。理想は近きにあるのに、あえて近よらなかった。

それはただひとつ、現在の社会組織をはじめに崩壊させなければ、新しい社会建設はできないと考えるからである。それはしかし不要である。要は、農民自身の自主と発案で自給自足を中心とする村を作ればよい点に気付かなかったからである。他人に要求するのではなく、農民が、農民自身で、そこに今述べたような村をはじめることである。

もし、「国家」が真に人民の幸福を目的とするものであるなら、こうして生れた農民の「共同社会」に対し、国家は尊敬の念をもって理想の実現を祝福してくれるのが道理であるが、そういうことは木によって魚を求むるにひとしく、国家なるものは、かれらが考えた一定の社会組織を社会組織として吾々に強制することにより、一部の特権を維持する体制の保持を目的とするものである。そのため無数の「法律」が存在し、刑務所が吾々を待っている。

故に、政府、役人、警察、ブルジョアおおかえの教育家どもが、口をそろえてこの「共同社会」を目指して「秩序破壊」と言って迫害と圧迫を加えることは何等怪しむに足りない。しかし、事実はその逆であって「社会秩序」を紊るものこそ実にこの奴輩である。

この奴輩とのたたかいは、かれらと戦うことではない。かれらと「政治的」にたたかうよりも、前言したように「経済行動」、自給

自足の戦術を飽くまで死守することである。しかし、最終的には、吾人は「共同社会」の防衛を行わねばならない。防衛のためには戦わねばならぬ。吾々としては戦うのは本義ではない。しかし、支配階級の者たちが共同社会の破壊に出るならば、これに対抗して共同社会を防衛しなければならない。敵の暴力に対しては暴力も止むを得ない。それは村を愛する愛村心の自然の発露である。

しかし、村人だけではない。支配階級の不条理なる暴挙に対しては、農民だけではなく農民と心を同じくする無産階級の同志は立ち上がることは必然である。支配階級の走狗とも言うべき官吏、官僚にいたっては、農民に対する徒なる抵抗を止めるべきであろう。

解放とは、片々たるかれらに復讐を加えることではない。しかし、かれらが事理をわきまえず暴挙に出るならば防衛的抵抗は止むを得まい。おそらく農民運動に対する支配階級の暴圧に比例して、いずこからとなく政府上層の要路の者に天誅が加えられることは必然の成行きであろう。

かくして、村から村へ新しい「共同社会」の運動の火の手が上がり、既成権力が狂奔し、物情騒然となるであろう。

村は自給自足を固くし、奸商どもが如何に利を以て農作物の売りわたしのぞもうとも、村は決してそれに応じない。反対に万一、目前の利益にまどわされて自給自足がくずれば、その瞬間に農村はふたたび貧困なる古い農村に復帰することが必至である。

反対に、村の精神と精神と、「共同社会」に投じてくる者は、拒む理由は全くない。否、都市の工場労働者諸君！ 諸君が来たり投ずることは全村があげて望んでいる。労働者諸君、諸君は資本家との収獲少なき抗争から足を洗って、「共同社会」に投じてほしい。村は、君達がその熟練した技能で農具をはじめ諸々の工業製品をこしらえてくれることを望するものだ。

こうして都市の労働者が移り住むことによって、農村は単なる「共同農村」ではなくて「共同社会」となっていくのである。

さて、農村の自給自足の実行によって、都会に於てはいかなる現象が現われてくるであろうか。それは第一には食料品の欠乏である。食料品の欠乏について起こる食料品の価格騰貴、それはあたかも寒暖計の水銀柱のごとく上昇せずにはおかぬ。低廉なる賃銀に逆比例する物価の昂騰は、都会に於て何がおこるか。ドイツも、イタリアも、ロシアも、このような状況で民衆の暴動が勃発して、それは革命の方向にむかっただのである。ロシアでは、そのとき、パンになやむ無産婦人のデモンストレーションが食料品店と穀物倉庫を襲い、掠奪し、これをきつかけとして一九一七年の革命烽火が発生した。

逆に、都市工場の生産するいかなる物資も農村は購入しない。インド人がイギリス綿布を買わなかったように。金融機関の倒産が起こってくる。政府は倒閣し、混乱が必至である。労働者は今やかれらを雇傭する資本家がいない。当然のこととして労働者の運営と管理が行われるに至るであろう。

社会変革は必至である。

由来、ロシア革命も、ドイツ革命も、フランス革命も、一切の革命は何故失敗におわったのであろうか。その理由をたずねれば、革命が都会におこって都会に終わるの故である。いかに既成権力が倒れようと、都会が存在するかぎり、都市は食糧を農村にもとめなければならぬ。権力が有るまいとしても、食糧の徴発のために権力が生まれ、政府が樹立されるに至ることは免れがたいところである。諸事物々、これに伴って旧に復し、かの革命は空しく消え去って行かざるを得ないのである。

故に、解放は解放の方法をえらばねばならない。それは繰返し述べたように、農村を骨子とする自給自足の「共同社会」建設よりほかに方法はない。

今日、よく言われることである、「吾人は起たねばならぬ」と。そこに約束される意味は、暴力によって支配階級をくつがえすことかのごとく解されている。しかし、人間は容易に暴力に立たぬのである。しかし、「吾人は起たねばならぬ」という意味が、今日、農村が自給自足を実行し、共同と相互扶助を実行することを指し、民衆は村にかえり、民衆自らの生活を「共同社会」にいとむことであるとき、そこに加わってくる支配階級の暴圧であれば、人は止むに止まれぬ創造的暴力によって暴圧に抗することは「暴力第一主義」とは全く異ったものである。

こうして、支配階級の社会組織におかまいなく、農民の自主による発生した「共同社会」は、支配階級のあがきによって変えねばならぬものは何もない。ただ、あたらしく都市を捨てて農村に移ってきた人達のために共同社会の成員は増し、その人には「共同社会」の中で、なかの有益な工業生産に従事することになる。それと同時に、農村に於ける工業を完全に行なうために、人々は発案し、協力し、都市に集中している工場の「共同社会」への分散をはかり、農村社会の中に立派な共同工場が建って行かねばならぬ。

農村が自給自足を実行する段階として、都市からの移住者が、手工業をまず始めたのとは逆に、都市は、革命の後はずきま耕作のために忙しく立ちたらくことが必要である。田畑を開拓して食うものを作ることが先決である。旧都市も旧農村も存在しない。どれもが自給自足、相互扶助の「共同社会」である。

農民諸君！ 村を救うものは上述したように農民自身のほかにない。諸君が、今すぐ、自給自足の「経済行動」を実行することだ。もし、それがいやなら都会に巣喰うボルシェヴィキの餌食となるであろう。

吾々がボルシェヴィキを攻撃すると、多勢の中には不思議に思う人があるかも知れない。ボルシェヴィキは社会の変革を目的としているのに、なに故、かれらを批難するのであろうかと不審をいだくかもしれない。しかし、社会の変革といってもいろいろある。豊臣を倒して徳川の天下にするのも社会変革である。しかし、吾々民衆の立場からすれば、豊臣の天下であらうと徳川の天下であらうと、農民生活が解放されないことに於ては、全く等しく百姓の敵である。

地主、資本家の政府はいはば豊臣だ。この既成支配階級の政權をうばって、権力を自己の掌中におさめ、天下の支配者になろうとするのがボルシェヴィキである。ボルシェヴィキは徳川である。徳川に対し、豊臣は三・一五だの、四・一六だのといって、自己政權を守るために弾圧を徳川ボルシェヴィキに加えているのが現状である。

このふたつの支配勢力が、自己を有利にみちびくために一般民衆の支持を得ようとして、あたかも自分が民衆解放の天使かのように喧嘩八百をつらね、民心の収攬にこれつとめておるために、政府に胡麻化されぬ人でも、ボルシェヴィキの言辭にはとくく胡麻化され易い。豊臣を倒して徳川になるだけのことであるのに、そのことを知らず、ボルシェヴィキが社会の変革を企てているのを見て、一も二もなく自分達の味方であるかのように誤解するのである。ボルシェヴィキが若し都市で権力を掌握し、赤色政府を樹立すれば、農民の地位はどうなるか。ボルシェヴィキのコムソールのチエカが村にやってきて百姓に命令する、第一に「農作物の強制徴発」である。農民の生産物は、ある場合には春蒔用の種子まで掠奪して行く。もし命令に違反すれば、消される。その残忍冷酷さは帝政時代を凌駕するものがある。否、ボルシェヴィキの遣方は、まず、第一に警察力をわがものにする、ことである。そして、警察の中に秘密警察を作ることである。これはナチスが用いた方法で、この方法で何万人という農民が裁判なしに消されたのである。反革命の名の下にである。これがボルシェヴィキの常套手段である。なにが農民の解放か。

こうして全露農村はボルシェヴィキが何であるかを知ったこの農民の血は怒りに燃えずにはおかない。反ボルシェヴィキの空気は農村に拡がって行ったのである。

ボルシェヴィキはすでにこのことを予期して、近來、益々「国营農場」(ソフホーズ)の増設に努めつつある。政府は重要な土地に政府の領地をさだめ、そこに全国から「失業労働者」や、「農具や土地を有たない貧しい農奴たち」をよせあつめ、低廉な「賃銀」でかれらを酷使し、民間のトラクターとか、肥料などを独占して、役人の監視下に農作物の生産に狂奔しているのであるが、これは將來、一般の農民が団結して解放のムシロ旗のもとにボルシェヴィキ政權に対して反乱をおこしたとき、ボルシェヴィキは農村の保有食糧として準備する用意にはかならない。この明瞭な事実をかれらは何と言つて胡麻化しているか、曰く「ボルシェヴィキは農村の開発につとめ、盛んにトラクターを人民に支給し、灌漑や排水につとめ、最新技術の農具を製造し、化学肥料を振興し、農業の個人経営から協同農場化に努力し、農村の社会主義化と産業五ヶ年計劃を押しすすめている、云々」と偽瞞している。

農民諸君、諸君は理解されたであらう。ボルシェヴィキとは何であるか。また、農民の真の「解放」と、ボルシェヴィキの方向とはいかに異なるものであるか理解されよう。吾等は、赤色運動の悪夢からさめねばならないと同じく、いまひとつ、陥り易い誤信からも目を覚ますことが必要である。それは農民組合、消費組合、協同組合などによって、解放がもたらされるように考える思想のことである。

繰りかえすようであるが、吾々に強制されている社会組織におかまいなく、農民自身の要求にしたがつて、いまずぐ自給自足の「共同社会」をつくるのが、解放の正しい道であるということである。農民組合は、小作人が小作人なる立場に於て地主に要求する団体であり、消費組合なども算盤勘定のうえに立つて多少の金銭上の利益を追求するところの考え方であつて、解放という見地からは出発点が誤まっているのである。

かりに農民組合によって、小作人の生活が些細な小作米の減免があつたとしても、小作が小作であることに何の変化もない。解放とは小作が小作でなくなることである。吾々は掠奪された土地を耕作する農民にとりもどし小作という封建制が崩壊するのが目的だ。農民組合はただ嘆願や協調や、団結によって、払ういわれないものを少なく地主に払うにすぎない。組合運動の発達せるイングランドに於て革命は決して起こらないが、その理由は労資の取引が発達していることにある。社会組織を根本から改革する熱意をうしなつた英国は、亡ぶべき民族として近來益々老衰の域にはいりつつあると言わねばならない。消費組合や農民組合のような「改良運動」では農民の活力は衰亡するばかりである。道はただひとつ、「経済行動」によって、強制されている現社会組織とは無関係に、農民の要求する自給自足の農民の「共同社会」の実行以外には方法はない。

たしかに、ある人には自給自足の現実性について疑問をもつ。

鉄道や、運河や、船舶によって世界の物資は相互にはこばれ、港は貿易に賑わい、多くの商品は外国からの輸入品である。

たしかに昔は、近代産業は特定の先進国の独占であつた。英国の造船、綿布、ドイツの機械工業などのごとく独占であつた。しかし世界大戦を機会にこの独占は崩壊した。インド、オーストラリア、アフリカ、中国、どこでも何でも生産されるようになった。国際的独占制は崩壊した。世界的分業は破れ、資本主義の過剰生産が独占をもとめて国際緊張を惹起しているのが現状である。

勿論、資源の偏在するものもある。石油とかゴムとか種々有るは有る。けれども必要は「発明の母」だというのが、まことに然りである。必ず天然のものに代用する人造の製品がでてくる。天然絹糸のかわりに木材、玉蜀黍、蟹の甲殻から人造絹糸がとられ、吾国資本主義の対米輸出が大打撃をうけていることは周知のとおりである。必ずしも天産がないということは恐れるには足りない。吾国の北部は甘蔗には不適であるが甜菜の栽培は可能である。これらは一例にすぎない。しかし、問題は自給自足可能であるから自給自足を

なすのではない。人はその土地で生活する。生活するが故に、そこで入用なものを生産するのである。これが本義である。「要るものは村で作ろう」これが精神的の基本である。

世の中に働きたいにも職がなく、生活を求めている者が実に無数である。また、職があっても妻子老父母を養うことが出来ず、スラム街に疲弊した生活をおくり、農民のように早天から耕作に出て、夕に星をいただいて辛苦して営々と労働に精出しても生活を失う者も無数である。こうした真剣で、正直、勤勉な人達こそ革命の中堅となる人達である。怠け者で口先きのうまい、他人を利用してうまく立ちまわる奴輩は吾等の敵である。

農民諸君！ もはや多くを言うまい。一日も速かに「共同社会」の建設を祈る（注21）、（注22）、（注23）、（注24）、（注25）。

（注21） 傍点は原文にはないが、要点を示すために付した。なお、原文を簡潔にするために多少の省略をおこなった。

（注22） 伊沢八十吉（長野県上伊那郡）は居村富県青年会担当村報「富県時報」の編集者をしており、昭和六年四月の富県時報第二号から翌昭和七年一月の第六号までにわたってこの「農民に訴う」の要旨を「村の人達に訴う」と題し、自給自足、自主自治による共同社会の建設運動を提唱し、また、昭和六年十月三日の部落祭礼にあたっては、自身の創作による「誰の罪か」と題する同様趣旨の啓蒙劇上演、また同年八月の青年会臨時総会に於ては、当時、官僚政府が企図していた官製青年訓練所の自主を叫びその要求を容れしめ、農青イズムに全村運動をリードした。

（注23） 同じく鷹野原長義（長野県小県郡）は居村大門村青年団長小林茂夫と協力して、村報「大門時報」に、この「農民に訴う」を「農村解放は斯くして為さる、徹底的経済闘争で行け」と改題し、大門時報昭和六年六月、七月、八月号に連載し、これは当時の農村の情勢に適應して付近町村にふかく滲透した。鷹野原、小林は八月末村報掲載事件のため検挙されたが、長野地方検事局不起訴となって落着した。

（注24） 当時、農民、特に信州農村に於ては村民は窮乏の極に達し現金というものが無かった。村の中で現金を受けているのは役場の吏員、小学校の教員だけ（実際は村税滞納の為俸給未払続出）ということから、教師憎悪が集中、教員給料の大幅引下を村会が決議。昭和五年七月には南佐久内山小学校では父兄が児童を盟休させ、これは全県下に忽ち波及した。いかに信州農村が困窮していたかが推察できよう。

（注25） 「農民に訴う」等、資料類の筆者名は、第七章、農青出版物リストに掲出した。